

---

# 絶体絶命兄妹

灯火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶体絶命兄妹

### 【Nコード】

N3717D

### 【作者名】

灯火

### 【あらすじ】

震災に見舞われ、瓦礫と化した街中で零れ出す秘められた想い。  
2chの某スレに投稿していた兄妹恋愛モノを纏めたものです。  
災害の情景描写がくどいと言われ、肝心の恋愛描写が足りないと言われた作品で、少々御都合な所もありますが。状況の割りに大した起伏が無く只管、淡々と進みます。

## 第一話：非常事態（前書き）

2chの某スレに投稿していた兄妹恋愛モノを纏めたものです。

災害の情景描写がくどいと言われ、肝心の恋愛描写が足りないと言われた作品で、少々御都合な所もありますが。

状況の割りに大した起伏が無く只管、淡々と進みます。

## 第一話：非常事態

学校から帰って直ぐ財布を持って家を飛び出した浩史は、淡い色合いにカラフルな文字が躍る看板の店

昨年オープンした地下三階に及ぶ巨大地下商店街、その地下三階にあるファンシーショップの前に立っていた

「行くしかないか・・・」

そう呟いてファンシーショップの扉をくぐる、男が一人で入るのは実に恥ずかしい限りだが背に腹は代えられない

- 学校帰りの放課後、校舎の玄関で妹の梢こずえに出くわし、最後通達を貰った

『お兄ちゃん、今日は何の日か思い出した?』

『ん? 朝も言ってたけど分からないな、何かあったけ?』

期待するような眼差し、落ち着きの無い雰囲気はワクワクとした気持ちを表していたが・・・

浩史の答えはそれらを一気にひっくり返し、失意の眼差し、どんなよりした雰囲気が哀しみの気持ちを表す

『・・・そう、お兄ちゃんはボクの事なんかどうでもいいんだね。』

『な、なんでそうなるんだよ』

『ふんだつ もういいよ!・・・明日になったら教えてあげる、そしたら・・・お兄ちゃんとはもう終わりだね・・・』

『ちよ、ちよっとまてっ 周囲に誤解を招くような事言っなよ!』

っていうーか今日が何だってんだよ』

いつもの過激？なジョークも混じっている為、見た目ほど落ち込んでいる訳では無さそうだが

機嫌を損ねたのは間違いないと判断した浩史は、必死で今日が何の日か考える・・・梢に関係する、梢が拘る日

『・・・あ！（今日は梢の誕生日だった！）』

『思い出した？』

『・・・思い出した』

『誕生日プレゼントは？』

『えーと・・・』

『・・・日付が変わるまでがリミットだからね』

そう言つて梢は、やって来た友人達と連れ立って何処かへ遊びに行った

普段なら『一度帰ってちゃんと着替えてから』と小言の一言も入れる所だったが

今回は兄の失敗に対する妹の配慮でもあるのだろう、と考えた浩史は急いで帰宅、梢が帰る前に家を飛び出し

プレゼントを買いに地下商店街へとやって来たのだ・・・そして冒頭のファンシーショップに到着する

『あいつ、小物とか結構好きだからなあ・・・ペンダント辺りでいいかな？』

梢に似合いそうな、それでいて丈夫そうなモノを選んでアクセサリーの棚を物色する

活発な性格なので直ぐに壊れそうなモノはダメだ、前に飾りの付

いた目覚まし時計をプレゼントしたら  
翌日には飾りの一部が破壊されていた・・・目覚ましのブザー  
を止める時にぶっ叩いて壊したらしい

『これにしとくか』

マリンブルーのペンダントを選び、レジへ・・・プレゼント包装  
装をして貰ってそくさと店を出る

店員さんに『恋人さんへのプレゼントですか？』と聞かれた時、  
遂 顔を赤らめてしまい、恥ずかしかったのだ

商店街出口の階段に向かおうとした時、ふいに足元に振動を感じ  
た >>ゴゴゴン・・・<< という何かの重い響き

そして

>>ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・ガタン・・・ガシャーン・・・  
メキメキ・・・ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・バキバキバキ<<

凄まじい轟音と共に世界が揺れた 立って居られない程の横揺  
れ 近くの店のガラスが碎けて弾け跳び

照明が火花を散らして次々と落下し、通路に置かれたあらゆる設  
置物が床の上を滑るように移動し、転倒する

彼方此方で悲鳴が上がり、さらに埃を舞わせながら天井が落ちて  
来た所で、辺りは一瞬にして暗闇に包まれた

『く・・・っ なんだこれ！ 地震か！？』

揺れはまだ続いている、一寸先も見えない真っ暗な中で、浩史は  
とにかく身体を縮め、頭を抱えて守り

明かりが消える寸前に見えていた丈夫そうな柱の近くに蹲って揺

れが収まるのを待った

>>ゴゴゴゴゴ・・・ゴゴン・・・ゴゴゴン・・・ゴ・・・ゴ・・・<<

揺れが収まり、埃っぽい空気の中に・・・パラパラという何かが床に落ちる音や、ギシギシという金属が擦れ合う音

ガラスが落ちたカシャン・・・という音を最後に静寂が訪れる・・・

・やがて彼方此方から人の声があがり始めた

「おーい、大丈夫かー」 「お母さん！ お母さん！」 「電話は通じないの！？」 「痛いよー・・・痛いよー・・・」

幸か不幸か、真つ暗な状況が惨状を覆い隠していた為と、大勢の声があつたお陰で、パニックには至らなかった

浩史はとりあえず自分の身体を調べて何処にも異常が無い事を確かめ、現状を把握する為に何か無いかと模索する

しばらくして暗闇の中で青白い光や緑色の光が淡く灯り始める・・・

・携帯電話のディスプレイの明かりだつた

電話は通じないようだが僅かでも明かりの確保が出来る、それを懐中電灯代わりに周囲を散策し始める人も居た

『携帯か・・・俺は持つてないんだよな・・・梢は大丈夫かな』

そんな事を思いながら胸の内ポケットに入れてある誕生日プレゼントをそつと確かめる、そして思い出した

梢が自分の誕生日プレゼントにくれたキーホルダー、かなり明るい光を放つキーライトが付いていた筈だ

ポケットに付けてあるキーライトを取り出そうとしたその時、遠くで聞き違い様の無い程良く知つた声が響く

「誰か手を貸して下さい！      お願いします！      友達が下敷きになってるんです！」

「こ、梢？」

かなり離れた場所から梢の叫ぶ声が聞こえる、友人が瓦礫か何かの下敷きになっているらしく

周囲に助けを求めているようだ      ・ ・ ・ 急いでポケットからキーライトを取り出し、スイッチを押すと

強烈なLEDライトの光が周囲を照らし出した

「うっ！」

辺りの惨状に思わず呻く 身を寄せていた柱は真ん中辺りが拉げたようにずれていて、中の鉄芯がはみ出している

階段は上から落ちてきたであろう瓦礫で完全に塞がっており、通路の天井も半分近く斜めになって所々穴が開き

床にも無数の亀裂が走り、特に大きな亀裂には50cm近い段差が出来ていて、通路の途中には大穴が空いていた

「こりゃ酷い・・・ このまま歩いてたら気付かずに落っこちてたな・・・」

梢の声が聞こえた方向に行くには、この大穴を迂回して行くしかない      ・ ・ ・ 周囲を見渡す

カラフルな看板が現状ではシニールに映るファンシーショップを見ると、ガラスは尽く砕けていて

中の様子は真っ暗で分からない、客は数人しか居なかったのを覚えていたが・・・ 中に入るのは躊躇われた



「・・・でも、行くしかないよな」

天井と足元に注意しながら、ジャリジャリとガラスを踏む音を鳴らして店の中に入っていく

店の中も棚が倒れ、天井が落ち、奥の一角が崩れて酷い有様だった

この店は出入り口が二箇所、階段に近い方と中央通路に面する方があり、浩史が入ったのは目立たない階段側だ

中央通路側の出入り口からならば、梢の声が聞こえた区画にも行けるだろうと店の奥に踏み込んで行く

レジの前を通った時、壁に非常用懐中電灯が掛けてあるのを見つけたので拝借しようと近づくと

やけに生臭い匂いがして思わず服の袖で鼻を覆う、足元をキーライトで照らすと、床が真っ赤に染まっていた

天井からコンクリートの塊が突き出しており、レジの一角を押しつぶしている

『・・・さっきの店員さん・・・なのか・・・？』

赤い血溜まりを避けて壁に近づき、懐中電灯を手に取って声を掛けてみるが、返事や呻き声は聞こえなかった

懐中電灯が点灯する事を確かめた後、店内をざっと照らして他に人が居ないか調べた後、直ぐにその場を立ち去る

中央通路側に出ると、此方も酷い有様だったが 階段付近にあったような亀裂の段差は無いようだ

数人の人達が固まって座っており、携帯を持った何人かが声を掛け合いながら辺りの散策をしていた

浩史が手にした懐中電灯を見た中年の男性が、非常用懐中電灯を探して集めるように周囲の人に声を掛ける

『梢は何処だ・・・』

浩史は梢の声が聞こえて来た方向に向かって瓦礫の中を歩いて行く所々に倒れている人や怪我をしてる人を見かけ、掠り傷一つ無かった自分は幸運だったと思えた

やがて誰かのすすり泣く声が聞こえる先に、崩れた通路の近くで数人の人が固まっているのを見つける

懐中電灯の明かりを向けると、埃だらけの顔に汚れたスーツ姿やＴシャツ姿の若い男性が何人が振り向き

その足元では制服姿の女の子が、同じく制服姿の身体半分が瓦礫に埋まっている女の子に縋り付いて泣いていた

「梢・・・」

「！・・・ぐす・・・お兄ちゃん」

涙で頬を濡らした梢が、埃で汚れた顔をノロノロと上げる・・・

・ほんの一時間程前は明るく笑っていたのに

梢の側まで行き、片膝でしゃがんで視点を合わせると、胸の中に倒れこむように飛び込んで来た

「梢・・・無事でよかった」

「うつ・・・うつ・・・お兄ちゃん・・・ミナちゃんが・・・ミナちゃんが・・・」

背中を優しく抱きながら瓦礫に埋まった梢の友人に視線を向ける・・・ついさつき、学校で梢と一緒に歩いていた友人の子の一人だ

胸の辺りから下が崩れた天井やらコンクリート破片に埋まっている

息はあるようだが意識がなく、早く助け出してやらないとクラッシュシンドロームの恐れもある

「・・・可哀想だが、人の手じゃどうしようもない」

「重機か・・・せめてジャッキみたいな道具でもあれば、何とかひっぱり出せそうなんだが・・・」

救出を試みに集まってくれた彼らも、人力だけでは手の施しようがなく、悔しげに俯く

周りを見渡せば、あるのは瓦礫の山ばかりで 救出に使えるような道具にはなりそうも無い

「確か・・・二階には工具売り場があった筈だ、俺ちよつと見てきます」

「無駄だよ・・・上に行く通路は全部塞がってた」

こちら側に居た人達でその辺りの散策はやって居たのだろう・・・  
しかし

「それでも、一応・・・何か無いか探してきます」

「お兄ちゃん・・・」

心配そうに顔を覗き込んでくる梢の頭を撫でてやる  
そしてキーライトを取り出して手渡した

「明かりは暫らくこれで我慢してくれ、道具を見つけたら直ぐ戻るから」

「・・・うん」

もう一度頭を撫でて、浩史は懷中電灯を片手に瓦礫の中を奥へと進んでいった

第一話・非常事態（後書き）

## 第二話：救出活動

しばらく壁沿いに進んでいくと、壁と天井が崩れて行き止まりになった

この先にはエレベーターやエスカレーターのついた吹き抜けの中央階段があった筈だが、今は完全に塞がっている

何処かに抜け道は無いものかと瓦礫の山をうろついていると、微かに風の流れを感じた

流れを辿って店舗の一つ、ゲームセンターに入っていくと、天井が崩れて半分近くが瓦礫に埋まっていたが

風の流れは天井付近に向かっていた・・瓦礫の山を慎重に昇って崩れた天井を照らして見ると

「上の階の店か・・？」

人一人分位の隙間からこの店の上の階のフロアが見えている・・ここから二階に上がれるかもしれない

「危険だけど・・・行くしかないよな」

近くの店を漁ってロープ代わりになりそうなカーテンや横断幕を結び

その先にゲームセンターの椅子を括りつけて隙間から上のフロアへ投げ込む

二・三度繰り返すと上手く引っかかり、強く引っ張っても落ちてこなくなったので

懐中電灯をズボンに差し込んで登って行った・・・隙間の中までくれば、後は手足を掛けてスムーズに登る事が出来た

二階のフロアに立ち、ズボンから懐中電灯を取り出して周囲を照らす・・・ここも随分埃っぽい

「ここは・・・スポーツ用品店か」

二階の店並びを思い出す・・・工具などを取り扱っている店はスポーツ用品店の二軒ほど隣だった筈だ

あまり利用はしていなかったが大工道具には興味があったので地下街に来る度にショウウィンドウを覗いていた

この階でも遠くの方で人の声がちらほら聞こえている『救出はまだか』とか『遺体を運ぼう』とか聞こえて来る

壁や天井の崩れ方が酷く、通路に出られるのか心配だったが、崩れた壁の隙間から中央通路に出る事が出来た

だが、声が聞こえて来るのは瓦礫の向こう側で、此方側とは分断されているようだ

とにかく工具店を目指して妹の友人の救出に使える道具を探そうと通路を歩き出した

懐中電灯の明かりだけが頼りの真つ暗闇の中、足元や天井、壁と、全ての方向に注意しながら慎重に進んでいく

「ここか・・・」

工具店の一角は比較的崩れ方が浅かった為、出入り口付近から中の様子を一望できる

中を照らしながら進んでいくと、カウンターの所に初老の男性が

座り込んでいた

「あの・大丈夫ですか？」

「ん？ ああ・兄ちゃんレスキューか？」

「いえ、一般客ですけど・」

「ほうか、・救急はまだ来んの？」

「ええ、まだみたいですな」

「・んー」

それだけ言うと、老人は黙って目を閉じる　見た所怪我をして  
いる様子は無い

体力の温存でもしているのかもしれないと結論付けて、浩史は工  
具を探し始める

『ジャツキとか何処にあるんだろう・・・』

しばらくウロウロと倒れた棚や何かの道具がごちゃごちゃになっ  
てる山を漁っていると

老人が声を掛けてきた

「兄ちゃん　何探してんの？」

「あの、瓦礫に埋まってる人を助け出したいんですが・・ジャツ  
キとかが必要らしくて」

浩史が答えると、老人はよっこらしょっと立ち上がり、奥の棚の  
方に歩いて行く

そして滅茶苦茶になっている資材やら道具やらを掻き分け、中か  
ら赤い色のジャツキを掘り出した

さらに尺の長い作業用のバールも三本ほど引っ張り出す　老いた  
見た目とは裏腹に、実に力強い



「ほれ」

「あ、ありがとうございます！」

差し出されたジャッキとボールを受け取る、ズッシリと重く、思わずふら付く

老人は「カカカ」と笑って 元の場所に座り込み、目を閉じた

もう一度老人に頭を下げ、一階に通じる隙間の空いたスポーツ用品店に向かった

カーテンと横断幕のロープの、今度は逆の端にジャッキとボールを括りつけて慎重に降ろす

降りきったのを確認し、自分も隙間を通って一階に戻ってきた

『よし、早く持っていこう』

工具を持って梢の所に急ぐ

「梢、見つけてきたぞ！」

「お兄ちゃん！」

梢の所に戻ると、救出を試みに来てくれた人達がまだ残っていたので、早速工具を渡す

「上に登れたのかい!？」

「ええ、ゲームセンターの天井が半分落ちてて、その隙間から二階に上がれました・・・けど」

二階にも人が沢山居たようだが、途中で通路が塞がっていて合流出来そうに無い事等を伝える

説明しながらも梢の友人の救出作業を進め、更に応援を呼んで6人がかりでバールを使って瓦礫を持ち上げ  
僅かに開いた隙間にジャッキを差込み、慎重に持ち上げながらどうにか引っ張りだして救出する事が出来た

「ミナちゃん！」

「動かしてはいかん、・・・足首の骨折と・・・肋骨もやってるかもしれん、慎重に向こうへ運ぶんだ」

中年男性の指示に従って簡易担架を使い、梢の友人を広い場所に運ぶ

どうやらこの男性は医療の心得があるようだ・・・こういう状況に至っては非常に心強い

添え木等で応急処置がなされるのを見てみると、梢がそつと浩史の手を握ってきた

「ん？・・・どうした？」

「うん・・・ありがとう、お兄ちゃん・・・ミナちゃんを助けてくれて」

「俺は、道具を探して来ただけだよ・・・助け出せたのは手伝ってくれた人達と、彼らを集めた梢のお蔭だよ」

「ふふ・・・お兄ちゃんは、本当に優しいね　ボク、お兄ちゃんのそういう所、大好きだよ」

そう言って顔を赤らめると、そそくさと離れていった

「・・・大好き、か・・・」『そうだよな、・・・俺は梢の「お兄ちゃん」で、いなくちゃいけないんだよな・・・』

簡易ベットの傍らで心配そうに、しかし少し頬を赤らめて友人の様子を覗き込む梢の姿を、複雑な想いで眺めた

### 第三話：探索

震災発生から二時間      地下商店街      地下三階      中央通路

>>ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・<<

『・・・・・収まったかな?』

時折余震が続く中、地下に閉じ込められた人々は中央通路に集まってそれぞれ身を寄せ合い

救出が来るのを待ち続けていた

明かりは電池の消耗を考え集めた非常用懐中電灯を一つだけ中央通路で点して

個人的な使用は控えようという取り決めになった ・ ・ 携帯やペンライト等、個人の持ち物は自己判断で

浩史の持ってきた懐中電灯も取り決めに従って管理する人に渡したので

今はキーライトと梢の携帯が手持ちの明かりだ

友人の容態を見に行ってた梢が、浩史の陣取る通路の壁際に戻ってきた

「お兄ちゃん・・・」

「ああ、どうだった?」

「あんまり良く無いって・ ・ ・ 早く病院で手当てした方がいいみたいだけど・ ・ ・」

「病院か・ ・ ・ 外はどなってるんだろぅな・ ・ ・?」

地下街のこの壊れようから考えて、地上もかなり酷い事になっているかもしれないと考える浩史

「お母さん達も、大丈夫かなあ・・・」  
「・・・そうだな」

照明が落ちて歪んだ天井を見上げながら、浩史はこの状況を前向きに乗り越えて行く事を考える  
先程、崩れた天井から三階に登り、工具を持って帰って来た経験で少しながら自信が付いていた

「？ お兄ちゃん？」

徐に立ち上がる浩史を、不思議そうに見上げる梢

「ちょっとその辺りを調べてくるよ・・・余震で崩れて進めるようになった場所とか在るかもしれないし」

「ボクも一緒に行く」

「いや、危ないから梢はここに居てくれ」

「やだっ 一緒に行く」

立ち上がる梢を諫めようとした浩史だったが、梢は頑として一緒に行く事を主張した

「しょうがないなあ・・・気をつけて付いてくるんだぞ？」  
「ボクの方がお兄ちゃんより身軽だよ？」

実際、運動神経などは運動部で毎日身体を動かしている梢の方が優っていた

浩史はどちらかと言うとインドア派な印象を持たれているが、身体を動かすのは嫌いではない

運動系の部活動等には全く興味を示さないが、ただ単に理由が無ければ動かないという性格なのだ

動かなくてはならない明確な理由を持った時、浩史は普段のノンビリした生活態度からは

想像出来ない程の行動力を発揮する　・・本人の口から『行くしかない』という言葉が出た時がスイッチONの合図だ

「何処をしらべるの？」

「とりあえず、さっき上に登れたゲームセンターを見に行く」

キーライトを翳して瓦礫の上を進んでいく　・・中央通路を照らす懐中電灯の明かりが遠くなる

完全な暗闇は光が届く範囲の外は闇、灯りが途切れる事の無い現代の街では人為的に作り出さない限り在り得ない

梢は浩史の腕にしがみつくようにしながら歩く

「・・梢、そんなにくっ付いたら歩き難い」

「う、うん・・・」

ほんの少し離れたかもしれないような気がする程度しか離れない

「怖いなら皆の所に居れば良いのに・・・」

「べ、別に怖いってわけじゃ・・・!」

「・・梢、今は非常時だ　意地や見栄を張ってまで無理するような状況じゃ無い、本気で命がけの状況なんだ」

「！・・・っ 分かってるそんなの！・・・もういいっ 邪魔み  
たいだから戻る」

梢は浩史から離れると携帯で足元を照らしながら戻って行くこと  
する・・・が、

「危ないっ」

「！ きゃっ」

コンクリートの塊に足を取られて転倒しそうな梢をすんでの所で  
受け止める

キーライトから手を離してしまった為一瞬にして暗闇に包まれる  
が、携帯の淡いディスプレイの光が

ぼんやりと二人を照らし出す・・・微かな光に照らされて暗闇に  
浮かび上がるシルエットは、幻想的にも思えた

抱え込むように抱き止めた梢の身体は驚く程 軽く、細く、温か  
くて柔らかかった

梢の驚いた表情が目の前にある・・・その息遣いに合わせて上下  
する胸元、髪から漂うシャンプーの香りが

この腕の中で小さくなっている女の子に、確かな存在感を感じさ  
せる・・・

「大丈夫か？」

「う、うん・・・」

ゆっくり起こして立たせながらキーライトのスイッチを入れる

強烈な白色のLEDライトが幻想的な空気を切り裂いて、瓦礫に  
囲まれた現実を照らし出した

「ご、ごめんね・・・ボク、向こうで待ってるから」  
「ああ・・・」

気のせいかな、頬を赤らめたように見える梢は 今度は慎重に瓦礫の道を戻って行った

「・・・はあ」

ちょっとキツク言い過ぎたか・・・等と考えながら、気を取り直して周囲の探索に向かうのだった



## 第四話：脱出路

・ゲームセンターの前までやって来て異変に気付いた　・・入り口に大量の粉塵が舞っている

□元を袖で抑えつつ中を覗き込むと、瓦礫の量が増えていた　完全天井が落ちているようだ

『余震の影響か、危なかった・・上に居た爺さんは大丈夫かな?』

手持ちのキーライトでは懐中電灯ほど光が届かないので、ココからだと中の様子を詳しく調べる事は出来ないが  
粉塵の量が凄まじいので中に入っていく気にはなれない　・・少し時間を置いたほうが良いだろうと場所を移動する

『中央階段の吹き抜けの所が全部埋まってるとは思えないんだけどなあ』

どうしようも無いほど床から天井まで瓦礫で埋まって塞がってる通路を前に、さっきの天井の穴のような隙間が  
何処かに出来ていないか、空気の流れに注意しながら集中して風を感じようとする

・・微かに風が頬を撫でた

『・・・どっちだ?』

息を殺して僅かな空気の揺らぎも漏らすまいと、肌の表面に全神経を集中させる

・・その小さな空気の流れは、亀裂の入った壁の部分から流れ込

んでくるようだ

試しに埃を舞わしてみたら吸い込まれていった

通路の壁はアルミだかステンレスだかの化粧板で覆われているが、今はその殆どが歪んで剥がれ落ち

中の崩れたコンクリートが剥き出しになって亀裂が露わになっている  
・ ・ 空気の流れはその亀裂へ向かっていた

『この壁の向こうって・ ・ 空間があるのか？』

覗き込んで見るが亀裂の向こう側は確認できそうにない

石欠片で叩いて反応を見たが、表面の欠片が少し剥がれただけで  
ビクともしない ・ ・ 助走をつけて蹴ってみる

>>ドン・ ・ ・ <<

振動でパラパラと砂が落ちた程度でやはりビクともしなかったが、  
向こう側に空洞があるような音がした

「うーん・ ・ ・ ただの配管とかだったら意味無いけど、やるだけや  
ってみるか」

一度中央通路に戻り、先程救出作業に使ったバールを一本借りて  
再び壁の亀裂の前に立つ

誰かに手伝って貰う事も考えたが、ここに何かある事が確実なわけ  
では無い為、それは躊躇われた

無駄に体力を浪費させるのも気が引けるので、とりあえず自分で  
やれる所までやってみる事にする

『そういえば、梢は居なかったな・ ・ 友達の様子でも見てるんだろ

うな』

そんな事を思いながら、ボールを使って亀裂部分から壁を崩す作業に入った

作業開始からどの位経っただろうか、罅割れて脆くなっているとはいえ 中々に丈夫な壁は簡単には崩せない

テコの原理を使って体重を乗せながら少しずつ崩して行き、ほぼ一人が身体を潜らせられる程度の穴が出来た

壁の向こう側はこちら側と同じく金属製の化粧板が貼られているようなので、此方から突けば剥がせられるだろう

「ふう〜〜〜 後は向こうに蹴り出せば・・・」

「お兄ちゃん！」

一息付いていると梢の声が響いた、懐中電灯でしっかり足元を照らしながら、ジューズの缶を抱えてやって来る

「はいこれ、配給だつて」

「お、サンキュ 配給ねえ・・・ 所でお前、その懐中電灯・・・」

「うん？ 管理してる人がね、お兄ちゃんが何か脱出の為の作業してるみたいだから使ってもいいって」

「・・・ぶはっ、そうなのか？」

ぬるい缶コーヒーを一飲みしつつ梢と話す・・・さっきの事は気にしていないようだ

梢はオレンジジュースを『ぬるーい』と文句を言いながらちびちび飲んでいる

「お兄ちゃん、期待されてるよ?」

「・・・期待されてもなあ」

言いながら穴を開けた壁を見詰める・・・

「ボクも・・・期待してるから」

「え?」

思わず聞き返して振り向くと、梢は既に中央通路方面に向かって歩き出していた

「懐中電灯、そこに置いておくからねー!」

そういつてキーライトを振ってみせる

「・・・期待してる、か・・・」

なんだか胸の奥から力が湧いて来るような感覚、身体中に漲るやる気に疲れも吹っ飛んだ気がする

壁の穴の向こう側に見える金属板を睨み、助走をつけて一気に蹴り抜く

「開通キーック!」

>>ドガンツ・・・ガンツ　ガラン・・・ガランガラン・・・ガツシヤーン<<

派手な音を立てながら金属板が剥がれ落ち、壁の向こう側と繋がった

梢が置いていった懐中電灯を拾って向こう側を覗き込む・・・

「倉庫・・・かな？」

やたら派手な音を立てたのは金属板だけではなく、壁の向こう側にあったスチール棚が倒れた音だったようだ

その部屋はあまり広く無い空間に、色々な看板やらクリスマス装飾品等の小物が散乱していた

天井の蛍光灯等は尽く落ちているが、部屋全体はそれほど崩れている感じは無い・・・奥の方に歪んだ扉が見える  
位置的には中央階段の吹き抜けロビーに面しているモノと思われるが・・・

「・・・行くしかないよな」

穴に身体を潜り込ませる　少し狭かったがどうにか通り抜ける事が出来た・・・服が少し破れてしまった

モノが散乱していて足場が悪いので、とりあえず邪魔になる大きいモノを端に除けて足場を確保し

壁際に立て掛けて置いたボールを回収して歪んだ扉に向かう  
・・・ヒュウヒュウという風の音が聞こえる

「もしかして・・・、外の風か!？」

ボールの先を歪んだ扉の隙間に突き立てた

## 第五話：脱出開始

内鍵を開け、バールで何度か戸枠に圧力を掛けているうちに蝶板の一つが弾け跳び、扉を開く事が出来た

部屋の空気が風になって扉の外に吸い出されていく　・　・　懐中電灯で周囲を照らしてみる

大量のコンクリート片と途中で折れた階段が折り重なる瓦礫の山の先に、うつすらと星空が見えた

「外だ！」

今居るこの地下三階・中央階段の吹き抜けホールから地上までの高さは約14 m近くある

階段は全て落ちてしまっているが、一階と二階の崩れた部分が重なり、傾斜上に地上までの瓦礫の道が出来ている

ここを登っていけば地上まで出られそうだ　・　・　この下に埋もれている人が居るであろう事は、今は考えない

かなりの急斜面で足場も最悪だが、これだけの質量が重なる事で安定しているようだ

巨大な階段の欠片を避けながら脱出路を確かめる為に地上に向かって瓦礫を登る　・　・　そして

「・・・地上だ」

遂に地上に上がる事が出来た　・　・　街に灯りは無く真っ暗で、時折　・　・　懐中電灯らしき光が暗いビルの壁を横切る

崩れたり傾いたりした建物のシルエットが星灯りで浮かび上がり、

遠くの方からヘリコプターの音も聞こえるが

パトカーや救急車のサイレンの音など、今の状況に最も馴染む音が聞こえない・・・普段の車や雑踏の騒音も無い

『この辺に居た人は既に何処かに避難したのか・・・？』

まるでゴーストタウンのような静けさと暗闇による不気味さに、気持ちが始縮しそうになる

振り返ると、自分が登ってきた急斜面の瓦礫の下は、何処までも続いているような闇が口を空けている

「・・・梢が待つてる、行くしかないよな」

人間の闇に対する安らぎと不安、本能的な恐怖を呼び起こすような廃墟と化した闇の中に

妹に対する保護欲と使命感で贖いながら踏み込んで行く・・・  
遠くでようやく、サイレンの響く音が聞こえた

### 地下三階・中央階段前の倉庫

脱出ルートを見つけた事を報告すると、我先に飛び出して行く者や、それにつられて走りだす者が数人居たが

殆どの人は落ち着いて脱出の準備に取り掛かっていた

当面の問題はあの壁の穴では怪我人を運び出せない事だ

「先に脱出した人が救急隊員に連絡して、壁を取り除いて貰うようにすれば良いだろう」

「どうかな・・・ 彼の話じゃ この周辺でも救出活動すら始まってるみたいだから」

怪我人の搬送をどうするか話し合っている大人達を尻目に、浩史は怪我人を寝かせてある一角に移動する

「あ、お兄ちゃん・・・ 外に出られる道を見つけたんだってね、・・・ 凄いな お兄ちゃんは」

「はは・・・ 運が良かったただだよ 梢は大丈夫か？ 友達の容態はどうだ？」

瓦礫の下敷きになって怪我をした友人の看病をする梢を労う

「うん、ボクは大丈夫・・・ ミナちゃんはまだ目を覚まさないけど」

「傷が痛みそうだから、今は眠ってる方がいいかもしれない」

「ねえ、家・・・ 大丈夫かな？」

「どうかな・・・ 上もビルが傾いてたりしてかなり酷い有様だったから」

しばらく寄り添いながら他愛の無い話を続けていた・・・ その時

>>ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・<<

「また余震だ・・・！ 結構大きいぞ」

咄嗟に友人の身体を抑えて庇う梢と、覆い被さるようにして落下物から二人を庇う浩史

地の底から聞える大地を揺らす重低音・・・ 辺りに悲鳴とざわめき、何かが落ちる音と通路の軋む音が響く



>>ゴゴゴゴゴ・・ゴゴン・・・ゴン・・・<<

「・・・収まったみたいだな」

「うゝうん・・・」

目の前に梢の頭があったので無意識に撫でながら身体を起こす

『まだ余震が続くようならここも安全とは言えない、脱出を急いだ方が良さそうだな』

## 第六話：誕生日プレゼント

・結局先に脱出した人達が応援を呼びに行き、その間に何人かが残って壁を削っていく事になった

「梢は脱出組みと一緒に避難所に向かってくれないか？」

「え！ どうして？ ボクも手伝うよ！」

「いや、ここに居ても梢に出来る事は無い、力仕事だからね　・・  
それよりも」

食って掛かるような勢いの梢の肩に手を置き、諭すように言い聞かす

「先に避難所に行って家族の無事を確かめて欲しいんだ、あの子の両親にも現状を伝えないと心配するだろ？」

「あ・・・」

友人の事を友人の両親に伝えなければいけない、自分達の両親とも連絡をつける、これは結構重要な事だ

「うん・・・ そうだね、分かった」

「ただし、くれぐれも一人では行動しないように　・・家を見に行く時は誰か信頼出来る人と一緒に行くんだ」

浩史の言わんとする事の意味を悟った梢は、真剣な表情で頷く

「よし、それと後は・・・」

「？　まだ何かあるの？」

内ポケットから包みを取り出す浩史、大分よれよれになっているがプレゼント包装でリボンも付いている

「誕生日おめでとう」

ぽかんとする梢にそう言って手渡ししてやる　・受け取った梢は呆けたようにその包みを見ていたが

顔を上げて『開けてもいい？』と目で尋ねる、それに頷いて答える

「あ・・・綺麗」

マリンブルーのペンダントを持ち上げて見詰めながら呟き、顔が綻んで行く

包装紙とリボンを綺麗に畳んでポケットに入れ、ペンダントを首に回してくるりと背中を向ける

「お兄ちゃん、つけて？」

「ああ・・・」

梢の柔らかい髪を掻き分け、ペンダントの止め具のニューホックを合わせる

「へへえゝ　ありがとう、お兄ちゃん　・大事にするね」

振り返り、笑顔を見せながらそう言った梢の胸元で　青いペンダントが揺れた

・脱出組みを見送り、後に残った動かせない怪我人と数人の人達

が壁の前に集まっていた

「流石に硬いな」

「罅割れで脆くなつてた部分を削つてやつとでしたからね」

「ボールだけじゃあ・・・これ以上削るのは無理か」

コンクリートの壁を崩せるような道具でもなければ、壁の穴を広げる事は難しそうだ

『そうだ、二階の工具屋・・・』

ゲームセンターの方を覗いて見ると粉塵は大分収まっているように見える

さつき見た時は天井が落ちていたが、まだ上に登れるようならまた工具を探せるかもしれない

「ちよつと向こうを見て来ます」

集団から離れ、ゲームセンターの中の様子を調べてみる・・・天井を照らすと二階のスポーツ用品店の天井が見えた  
何処か登れそうな場所は無いかと見渡して探すと、壁際に設置されてある大型筐体の上からなら二階に登れそうだ

『そういえば・・・二階の人達は脱出したんだろうか？ あの手爺さんも気になるし』

筐体が揺れないか確かめてからよじ登る

「お、そんな所から上がれるのか」

「ええ、ちよつと見てきます」

「気をつけてな」

残った人々の中では浩史が一番若くて身軽だ、声を掛けてくれた男性や中年の人達には

ここをよじ登るのはキツイのだろう、後に続くこととする者は居なかった

## 第七話：和み系？

スポーツ用品店の中は床が落ちてしまっているの、二階によじ登って来るとそのまま通路に出た

通路には余震の被害があまり出ていないらしく、先ほど上がったきた時と殆ど変わらない

違っていたのは、通路の先を塞いでいた瓦礫が無くなっていた事

．．．どうやら余震で瓦礫の下の通路が崩れた際、一階からも落ちてきた瓦礫と重なって穴を塞ぎ

その上を歩いて渡れるようになったらしい

『二階の人達はここから脱出したのか．．．』

通路の穴を塞いだ瓦礫の上に立って天井を見上げると、一階の通路に続く穴からロープが数本垂れ下がっており

さらに一階の天井にも穴が開いていて、上の階からロープや縄梯子が垂れ下がっている

『でもここからだ怪我人は運べそうにないな．．．何か工具を探そう』

踵を返してその場を後にする　．．と、何処からか声が聞こえた気がした　足を止めて耳を澄ます

『．．．？　気のせいかな』

三階で作業している声が聞こえたのかもしれないと結論付けて、

道具を探しに工具店に向かった

・・・工具店にあのお爺さんの姿は無かった 既に脱出したのだろう  
引っ繰り返った色々な道具類の中から必要なモノを探し出す

何が何処にあるかは分からなかったが、先ほどの爺さんに道具を  
見つけて貰った場所から

柄の長さが1mくらいある解体作業用のハンマーを見つけた・・・  
かなり重く、破壊力がありそうだ

他にも鉄鋸が束で見つかった、これで壁の中に鉄芯があっても  
斬り取る事が出来る

『よし、これだけあれば壁を崩せるぞ』

解体ハンマーを二本と鉄鋸を五本程持ってスポーツ用品店まで戻  
り、下に居る人達に声を掛ける

「おお！ これなら壁を壊せるぞ」

「さっそく作業に取り掛かるう」

二階から手渡し終え、下に降りようと足場の筐体に足を掛けた時、  
また声が聞こえた気がした

今度は間違いなく二階の通路の方からだ・・・まだ逃げ遅れた  
人が残って居るのかもしれない

「ちょっと二階を見回ってきます、逃げ遅れた人が居るかもしれない  
いで」

「ああ、気をつけてな」

「こっちの作業は任せてくれ」

瓦礫の通路を越えて二階の中央通路に出る 通路等の造りは基本的に三階と同じだが

店舗の中に家具売り場があったせいか、布団やベットマット、ソファー等が多数放置されていた

「誰か居ますかー」

叫んで耳を敬ててみる・・・すると

「たすけてくださーい」

遠くから確かに助けを求める声が聞こえた・・・女の子の声だ  
声の聞こえた方向に通路を進んでいく

「・・・ここか」

「ふえーん 出してください」

入り口が崩れて塞がったトイレの奥から聞えてくる

「大丈夫か？ 怪我とかしてない？」

「は、はい 怪我はないです・・・ 多分」

「多分て・・・」

「真っ暗なんです」

『ああそうか』と納得しつつ、この崩れた入り口をどうしたものかと思案する



「しかし・・・なんで君はここに取り残されてるんだ？ 二階に居た人達はもうとつくに脱出したみたいだけど」

「へ？ わたし、今さっき気がついたんですけど・・・」

彼女の話によると、トイレから出ようとした時に地震が起きて転倒、そのまま今まで気を失っていたらしい

気がつくと暗闇と静寂の中に独り取り残され、途方に暮れていた所に何処からか壁を叩く音が聞こえてきたそうだった

「なるほど、それで助けを呼んでいたのか・・・」

この量なら手作業でどうにかかなりそうだと判断した浩史は、話を聞きながら崩れた入り口の瓦礫を退かして行く

作業の間、暗闇の中に独りで閉じ込められている女の子を励ます意味でも会話を続けた

「そつえば君の名前は？」

「あ、御堂 梓あずさです 中学二年です」

「あずさちゃんか・・・俺は八神 浩史、高三だよ 中二って事は梓ちゃんは14歳か・・・」

「あー お兄さん、女の子の歳は言っちゃいけないですよ？」

「そ、そうか スマン」

そんな会話しつつ、瓦礫の撤去を続けていくうちに少しだけ瓦礫の間に隙間が出来た

「あつ あつ 光が見える〜」

「危ないから少し離れてるんだよ？」

入り口の上半分程まで退かした所で動かせそうにない塊りに阻まれ、これ以上の撤去は無理と判断する

「この隙間から引っ張り出してみる、そっちから登れるかい？」

「う、うん・・・ やってみる」

『んしょ、んしょ』と反対側から登ってくる梓を励ましながら、足場を固めて引っ張り出す準備を整える

やがて隙間から梓が顔を覗かせた・・・栗色のショートヘアーにさくらんぼのような髪飾りをつけた女の子だった

「お兄さん！」

「よし、もうちょっと こっちに手を伸ばして」

白いブラウスの袖から生える小さな手を取って引っ張ると、その身体は予想以上に軽く

勢いよく飛び出してきた為、落とさないように慌てて踏ん張る

「あわわわっ」

隙間から勢い良く引っ張り出された梓も、そのまま床にダイブしそつになったので慌てて浩史にしがみ付いた

梓を首にぶら下げたまま、片手でしっかりと抱きとめて瓦礫を降らせる

「・・・もう、大丈夫だよ？」

「え？ あ！」

浩史の首にしがみ付いたままぶら下がっていた梓は、慌てて手を離す・・・で、盛大に尻餅をついた

「いたたた・・・ わっ わきゃああ」

さらに大股開きでパンモ口状態だったネコさんパンツを慌ててスカートで隠す

「・・・ネコ・・・」

「っ！ み、見ましたねえっ！」

顔を真っ赤にして睨みつけて来る梓だが、上目遣いの涙目で迫力  
は無い、寧ろ可愛い

「事故だ」

「うっうう」

噴出しそうなのを堪えながら、浩史は冷静にそう返して梓に手を  
差し伸べる

恥ずかしそうに唸りながらその手をとって立ち上がる梓だった

「助けてくれたお兄さんは ” えっち ” で ” でりかしー ” の無い人  
でした、まる」

「なんだいそりゃ」

「日記ですっ 見せませんよ？」

「いや、みないけど」

メモ帳になにやら書き込んでいく梓を、『面白い子だなあ』と観  
察する浩史は、気持ちが和んでいくのを感じた

「和み系？」

「？」

・・・梓を連れてスポーツ用品店の所までやって来る　・・・三階で作業している人達と合流して一緒に脱出する為だ

二階の人達が脱出に使った穴もあったのが、梓を一人で行かせるのは気が引けた

「ここを、降りるんですかあ？」

「ああ・・・大丈夫、ちゃんと下で受けとめてあげるから」

そう言つて浩史は先に筐体を伝つてゲームセンターの中に降り、上で不安そうにしている梓に手招きする

おぼつかない様子で筐体に足を掛け、そろりそろりと降りてくる梓を下から支えてフオローする

最後の一段は足が届かないので結局浩史にしがみ付いて降りた

「わっ・・・三階だあ」

「そうだね」

変な感心の仕方をする梓に苦笑しながら作業が進められている壁の所まで連れて行く

ちなみに梓は移動中ずっと浩史の服の裾をちょこんと摘んでいた・  
・そんなさりげない行動も浩史の心を和ませる

「どうですか？ 壁の様子は」

「ああ、なんとかかなりそうだよ　・・・所でその子は？」

視線を向けられた梓はピクリとして浩史の背中に隠れた

「二階で逃げ遅れてたみたいなんで連れてきました」

「そうか・・・怪我も無いようだしなによりだ　・・・しかし色々見

つけるなあ君は」

中年のおじさんはそう言って笑うと作業を再開した 壁の穴は二  
周り程広くなっている

怪我人に乗せた簡易担架を通せる位まで広げられれば後は脱出す  
るだけだ

## 第八話：探索のプロ

・壁の解体作業は手伝いを申し出たが『君は休んでいてくれていい』との事で、動かせない怪我人の側で待機中

梢の友人はまだ目を覚まさない　・魔されている様子は無いが、少し熱が出ているようだ

『そういえば水が無いなあ』

店の中にあつた缶ジュースやペットボトルは粗方持ち出しているし、水道は当然使えない

「ううゝゝゝ　お腹空きました・・・」

壁際にちよこんと膝を抱えて座っている梓が情けない声を出す  
小柄な身体をますます小さくして丸まっている姿は小動物のような雰囲気を持ち、保護欲を掻き立てられる

「避難所に行けば、おにぎりくらいはあるかもしれないぞ？」

「お兄さんは平気なんですか？」

「いや、俺もそろそろ腹へってきた」

「ですよねゝゝゝ　はあゝゝ　今日はケーキ食べる予定だったのに・・・」

深い溜息を付いて丸くなる梓

・この子の元気の無い姿は妙に胸にチクリと来る、この子は元気な方がよい　・浩史はそんな風に思った

「じゃあ、何かないか探してくるかな」

立ち上がり、作業の進み具合を見て探索範囲を考える

『この階と二階、ついでに一階にも上がれるなら見に行くか・・・  
飲食店街だから何かあるかも』

「？ 何処行くんですか？」

「水と食料の探索」

「あ、じゃあわたしも・・・」

付いて来ようとする梓を手で制して止めた

「危険だからここに居てくれ、あまり動き回らないほうがお腹も空き難いだろうしね」

「ん・・・はい・・・ お兄さん、気をつけてくださいね？」

「うむ、素直で宜しい 大丈夫だよ」

安心させるようにそう言いつと、懐中電灯を片手にバールを持って探索に出掛けた

まずは三階の探索、中央通路沿いの店舗は粗方調べつくされてい  
るだろうから

店の裏口や通常のルートでは行けない場所を中心に探す事にする  
最初に居たファンシーショップの方も、今度はもっと詳しく調べ  
てみる事にした

『そういえば、あの大穴はどうなってるんだろう？』

ファンシーショップ前の通路に出来た大穴の様子を見に行く・・・  
何処まで続いているのか、真っ暗で底は見えない

下水溝か、或いは地下鉄関係のトンネルか何か、特に悪臭など

は無いので下水では無さそうだが・・・

次に中央通路側の入り口からファンシーショップの中に入り、関係者以外立ち入り禁止の扉に向かう

レジカウンターの場所とは対角線上にあり、店の奥の端にある周囲の倒れた棚等を退かして扉を開けると

狭い通路の両端に設置されたスチール棚に書類やら小物のストックやらが乱雑に押し込められて

それらが床にも散乱している 棚は空間が狭いせいか、傾いている程度だったので直ぐに起こして通る事が出来た

奥に進むと、開封された缶コーヒーの箱が2ダース程置いてあった・・・従業員が休憩がてらに飲んでいたのだろう

ミニ冷蔵庫があつたので中を覗くと、ペットボトルのお茶に、やはり開封済みのチョコレート菓子の箱があつた

棚に置かれていたファンシーショップの買い物袋にそれらを入れ、缶コーヒーの箱を抱えて店を後にする

「うーん 我ながらほんとに色々見つけるなあ」

壁の前に戻ってきて作業をしている人達に缶コーヒーを配り、梓にはチョコレート菓子を渡してやる

「わーい お兄さん大好き」

ぴよんぴよん跳ねて大喜びする梓を見ていると気持ちが和んで来る

『やっぱりこの子は笑ってる方がいい』

「うん？」



「いや、なんでもないよ・・・さて、次は二階を見てくるかな」

ファンシーショップの棚から持ってきた買い物袋の束から何枚か取り出してポケットに突っ込み

ゲームセンターの筐体をよじ登ってスポーツ用品店前の通路に出る

スポーツ用品店の壁際にスポーツ飲料のチューブパックが並んでいたが

床が落ちてしまっている為、取りに行けそうに無いのでそれは諦める

二階の店舗は殆ど調べつくされていて、食料関係は残っていないかった・・・靴や鞆等も持ち出された形跡がある

『次は一階か』

瓦礫の通路の所からロープを伝って一階に上がってきた・・・

何か焦げ臭い匂いがする

火を使っていた店もあった筈だから、地震の際に小火が起きたのかもしれない

食料品を扱っていた階だけに色々な匂いが混じって漂っている

柱の近くにある店、入り口が比較的崩れていないレストランに入って厨房等を物色してみるが

ここも殆ど散策済みらしく、棚やキャビネットは粗方開かれており、中身は空っぽだった

厨房の奥にある大型冷蔵庫は天井が崩れてコンクリート片がぶつかった衝撃でか、扉が変形して開いていない

『この中はどうかろう?』

ボールを使って袂じ開けに掛かる・・・人の手では無理そうだが、ボールを使えば意外とあっさり開いた

まだ冷気が残っていたらしく、冷えた空気が漏れ出してくる・・・覗き込むとフルーツの切り身やケーキがあった

『まだ盛り付けしていないケーキか・・・作り立てなんだろうな』

近くの棚に放置されているケーキの箱を組み立て、フルーツの切り身を適当にトッピングしたケーキを収めた

切り分けるのに使うナイフと皿も数枚、買い物袋に入れて厨房を後にする・・・梓の喜ぶ姿が目に見え、頬が緩む

『梢にもあげたかったけど、次の機会にするか』

買い物袋を腕に通し、ケーキの箱を口に咥えて慎重にロープを伝って二階に下りる・・・ボールは先に落としてある

同じ要領で筐体を伝って三階に降り立ち、解体作業の音が続く壁の前まで戻ってきた

「梓ちゃん、ケーキ見つけて来たぞ」

## 第九話：避難所へ

「」  
「」

ご機嫌な様子でケーキをついばむ梓

すっかりフォークを用意するのを忘れてしまったのだが、そのまま齧り付く事で解決した

解体作業は一時休憩して、皆でケーキを食べている　・・怪我人の人も食べられる人には食べてもらった

真っ暗な瓦礫の中、数本の懐中電灯の灯りの中でケーキを食べるという、なんともシュールな光景だ

「ごちそうさまでした」

「満足そうだな」

本当に嬉しそうな表情で指についたクリームを舐めている梓姿に、この場の空気が和む

「うんっ　大満足　お兄さんの好感度アップですよv」

「そうか・・・」

自然に、梓の頭を撫でる　・・梢が小さい頃に、よくこうやって頭を撫でてやっていたのが無意識に出たようだ

梓は少し驚いた顔を見せたが、直ぐ目を細めて気持ち良さそうに抱擁を受け入れた

「えへへ・・・　なんだか、本当にお兄さんみたいですわね」

「ああ・・・　妹がいるからね」

「あ、そうなんだ・・・　いいなあ、わたしもお兄さん欲しいなあ」

膝を抱えて丸まりながら爪先で遊ぶ梓

「梓ちゃんは兄弟いないの？」

「うん、わたしは一人っ子ですよ？」

梓と他愛の無い雑談をしているうちに解体作業が再開された、あと少し削れば簡易担架を通せる隙間が出来る

直ぐに脱出できるように担架に怪我人を固定するベルトを締めなおしたり、移動中に懐中電灯を使えるように

担架の足に括り付けたりと、脱出と搬送の準備を整える・・・梓も毛布を掛けたり、畳んで纏めるのを手伝ってくれた

「よし、これなら担架を通せるだろう」

「また余震が来る前に急いで脱出しよう」

「あ、じゃあ　俺が先導します」

浩史は一度瓦礫の山の坂道を地上まで登っているの、足場のしつかりしたルートを選んで進める

特に反対する者も居なかったので梢の友人を乗せた担架の前側を担当する事になった

「担架の搬送で他の人は手一杯だから・・・　梓ちゃん、そっちの小物頼めるか？」

「うんっ　大丈夫」

梓はそう言つて予備の電池やらガムテープ等の小物が入った袋を『んしょっ』と担ぐ

「よし・・・、じゃあ行こう」

怪我人に乗せた担架を担ぎ、壁の穴を通して中央階段の吹き抜けに移動する

瓦礫の山の斜面に巨大な階段の塊りが岩のように横たわり、吹き上げる風が亡者の声を思わせる風鳴りを響かせた  
遠くでサイレンの音が聞こえる・・・

「階段の塊りの下には行かないように、迂回しながら進みましょう」  
「そうだな・・・ あんなモノが滑り落ちてきたら、一溜まりも無い」

僅かだが星明りで何とか視界を確保出来ていたので、懐中電灯で足元を照らしながら進めば

担架を担いだままでも、どうにか安全に登る事が出来そうだ

「外なのに・・・真っ暗ですねー・・・」

「ああ、街中が停電してるだろうからね」

隣をよたよたと登ってくる梓が不安そうに灯りの消えた街を見渡す

改めて街の様子を見渡すと、根元部分が崩れて傾いたビルが隣のビルに凭れかかり

整然と並んでいた街灯や電柱はバラバラの方角を向いて、あるものは倒れ

真っ直ぐ立っている建造物が数える程しか見えない、街全体の灯りが消えた状態

上空を飛び回るヘリコプターの強烈なライトも、街の暗闇に吞まれるように

光線を描くだけで、僅かな範囲を照らし出すだけだった

そのヘリコプターのライトが照らしている付近は火事が発生しているらしく

皮肉にも街を焼き尽くす炎の灯りが、周辺の罅割れた街の様子を浮かび上がらせていた

そうして、ようやく瓦礫の山を登りきり、地上に辿り着いた

「この辺りだと避難所はやっぱり中学のグラウンドかな」

「そうだな、小学校はここからじゃあちよつと距離がある」

先に脱出させた梢の事を考え、待ち合わせ場所を決めておかなかつた事を少し後悔する

「梓ちゃん、大丈夫か？」

「う、うん 平気・・・ ハイキングは得意だから」

「そ、そうか」

何処かズレた答えが返って来るのが妙に楽しい、『もっとこの子と話をしたい』と思う浩史だった

## 第十話：避難所の喧騒で

罅割れて彼方此方で陥没している道路を歩いて避難所の中学校に向かう

陥没して出来た穴に乗用車が突っ込んでいたり、横転したバイクからオイルが広がっていたり

幅のある車道でも行く手を阻む障害物に事欠かない　・ビルが丸々道を塞いでいる場所もあった

「あ、いっぱい人が居る」

中学校の近くでは人が列をなして移動していた　・また一角では非常用公衆電話の長い順番待ち

家族や友人と連絡の取れた人達が避難所に集まって来たり、或いは他の街に住む身内の所に疎開する為

ボランティア活動も始まっていて、街を出る人々と街に来る人々の列が交差する

「やっと付いたか・・・担架は何処で降ろしましょう？」

「とりあえず緊急車両の近くで、ドクターカーも出ている筈だ」

医師の搭乗した医療設備のある高規格救急車がグラウンドの端で赤色灯を回していたので、そこへ運ぶ

「よし、ここでいいだろう　いやあ、君が居てくれて色々助かったよ、この子の事は任せてくれ給え」

中年の医者はそう言って救急車の中に入って行き、中の人達と今後の医療活動について話し始めた

「ふう、これで一段落ついたな」

「お疲れ様、お兄さんv」

和む笑顔で隣に立つ梓を見て気持ちが安らぎ、ようやく安全な場所まで避難出来た事を実感する

「ありがとう梓ちゃん、その荷物持つよ」

労いの言葉を掛けてくれる梓から小物の入った袋を受け取った

「ふうゝ 肩の荷が降りましたゝ」

ふにやゝと肩を下げて息を吐く仕草に思わず顔が綻び、自然に頭に手を乗せてしまう

この子の持つ小動物の雰囲気は、この非常事態で緊張した気持ちを和らげてくれる

「はは、文字どおりだね 梓ちゃんはご両親と連絡とかは？」

「んゝ あそこに並ぶのはちょっと・・・」

電話の順番待ちの列をちらりと見やる梓、確かに整然と並んでは居るものの結構混乱していた

小柄な彼女の身体である混沌に参加するのは酷かもしれない・・・  
それならば彼女の家を直接見に行く方法もある

「梓ちゃんの家は・・・」

「お兄ちゃん！」

言い掛けた所で聞き慣れた声に振り返ると、梢が点灯したキーラ



イトを振りながら走ってくる所だった

「梢！ よかった、待ち合わせ場所を言ってなかったから どうやって合流しようかと思ったよ」

「さっき担架を運んで来る人達が居たって聞いて、それでもしかたらって思ったの・・・よかったあ」

息を切らしながら安堵する梢の姿に、浩史も心配事が一つ片付いてホッとした

「お前の友達はおその救急車の所に居るぞ、医療設備のあるやつだからもう大丈夫だと思う」

「うん、ありがとう ミナちゃんのご両親とも連絡ついたよ、あとボク達の家の方は無事だったみたい」

「そうか・・・よかった」

ちよいちよいつと服の裾が引つ張られる・・・隣で置いてけぼりにされた梓が不満そうに見上げていた

「ん？ ああ、悪い梓ちゃん・・・俺の妹の梢だよ 梢、一緒に脱出してきた梓ちゃんだ」

「は、はじめまして・・・」

「あ、こちらこそ・・・」

急に紹介されたので戸惑う梓と、そんな梓に様子に戸惑う梢  
そして沈黙

「？・・・ど、どうしたんだ？」

「え！？ う、ううん何でも・・・ あ、梓ちゃん ちょっと待っててね」

「？」

そう言って梢は浩史を引っ張って少し離れた柵の所に移動する

「なんだ　なんだ？」

「しっ（ヒソヒソ）ちょっと、お兄ちゃん何よあの子は！」

さっきまでの喜びと安堵は何だったのかと思う程の剣幕でそう切り出してきた

「（ひそひそ）何って一緒に脱出した梓ちゃんだよ」

「（ヒソヒソヒソ）ほんとにそれだけ？　随分懐いてるじゃない、ボクが声掛けるまで雰囲気出してた癖に・・・」

何時から見ていたのかと突っ込みそうになる浩史だが、梢が梓に不快感を示す理由が分からなかったので

単に梓が自分の事を『お兄さん』と呼んで懐いている姿をみて、本家？妹としての嫉妬かと判断した

「（ひそひそ）梢・・・もしかして、妬いてるのか？」

「！（ひそひそ）・・・・・・ボクは・・・」

「・・・梢？」

怒って否定するだろうと思っていた『からかい』に対する梢の態度は浩史を戸惑わせる

赤らめた顔で俯き、胸元でペンダントをぎゅっと握り締めて、何かに耐えるような仕草はまるで・・・

「あゝ」

何時の間にか梓が直ぐ近くまで来ていた、ひそひそ話して言い合  
いをする二人を心配そうに見上げている

「あ、梓ちゃん」

「あ・・あはは、なんでもないよ？　ボク、ミナちゃん見て来るね  
！」

「え？　おい・・・」

浩史が止める間もなく、梢はバタバタと救急車の方に走り去って  
いった

なんとなく気拙い雰囲気が漂う

「わたし、人見知りするから・・・　梢さんに嫌な思いさせちゃい  
ましたか・・？」

「いや・・　梓ちゃんは悪くないよ」

薄々は感じていた、梢が普段自分に向ける過激な冗談や『好き』  
という言葉は

『兄』に対する『妹』の気持ちである兄妹愛とは少し違っている  
感じを

時折、自分に向けられる梢の視線に、熱っぽい情念の炎を感じる  
事があったが

それを自分の禁忌な欲望が見せる幻影だと言い聞かせて、兄で有  
り続けようとした

さっきのやり取りで『妬いているのか？』等とからかったのも、  
その期待が無かったと言えば嘘になる

そして何時も通り梢は『妹』の返答を反し、自分は『兄』で有り  
続ける筈だった

『妹の反応じゃ・・・なかったよな』

## 第十一話：内面力

梢も自分と同じ気持ちなのかもしれない、それで居てその気持ちを誤魔化していたのかもしれない

そして誤魔化しきれずに零れた気持ちの表れが、普段の過激な冗談や『好き』という言葉に出ていたのかも

「お兄さん・・・？」

黙り込んだ浩史の顔を心配そうに顔を覗き込んで来る梓

『・・・この子にこんな顔させちゃいけないな』

軽く笑って梓の髪を撫でてやる 心配そうな表情が少しだけ和らいだ

『お互いの気持ちに、決着をつけておかないと・・・いけないだろうな』

救急車の方を見ると、梢が友人の乗った担架の傍にしゃがんでいる  
こんな非常時だからこそ、日常で誤魔化し続けてきた気持ちが抑えられなくなつたのかも

「梓ちゃん、後で梓ちゃんの家の様子を見に行こう 送っていくから」

「え？ いいんですか？」

「ああ、一人じゃ危ないからね・・・梢に一声掛けておきたいから、ちょっと待っていてくれるかな？」

「はい」

浩史は頷き、もう一撫でしてから梢の所に向かった

\*\*\*

眠り続ける友人の傍で俯いてしゃがみ込んでいる梢は、自己嫌悪と嫉妬心に苛まれていた

こんな状況下、兄は自分や友人だけでなく他の人達にも手助けして回っている、それは誇るべき事だと思った

きつとあの子の事も手助けしていたに違い無い、でも他の女の子と一緒に居る所を見ると嫌な気持ちになる

『ダメだなあ・・・ボク、自分の事ばかり』

普段から自分の気持ちを抑えながらも、言葉の端々に気持ちを織り込んでアピールを仕掛けていているけれど

兄はちつとも気付いてくれない、「もっとはっきり言った方がいいのかな？」と考え、それを自分で否定する

『そんな事、言えないよね・・・』

もし気持ちを伝えて拒絶されたら、もう今までと同じ関係では居られなくなる・・・それが怖かった

\*\*\*

「梢」

「！」

ビクツと身体を震わせた梢だが、しゃがみ込んだ姿勢のまま振り

返る事はなかった

今は用件だけ伝えられればそれで良いと考えた浩史は梢の小さな背中に言葉を向ける

「梓ちゃんを家まで送ってくるよ、もしかしたら避難所にトンボ帰りになるかもしれないけど」

「・・・そ、そう」

気拙そうにだが、返事は返って来た

「それで・・・ 後で話があるから、家で待っていてくれ」

「・・・え？」

言葉の雰囲気に関何か重いモノを感じ取った梢は思わず振り返ったが浩史は既に背中を向けて歩き出していた、・・・その先に居るのは梓

「・・・」

思わず引き止めたい衝動に駆られる、だが理由が無い  
ペンダントを握り締めてその気持ちを抑える

梢は二人が並んで歩き去る後姿を、ただ震えながら見詰めていた

「・・・どうしてこんなに苦しいんだろ・・・ やだな・・・」

\*\*\*

予備の電池と懐中電灯を持って小物袋を避難所の管理をやっている人達に渡し、梓と浩史は中学校を後にした

「梓ちゃんの家はこっちの住宅街でよかったっけ？」  
「うん、学校からならいつも15分くらいですよ？」

倒れた電柱を跨ぎ、道を塞ぐように崩れ出した家の残骸を迂回しながら梓の家を目指す

時々避難所に向かう人達とすれ違うので、地下街近郊のような静けさは感じなかった

それでも灯りの消えた街というのは何処か不気味に感じる  
電気の消えた夜の学校がやけに不気味に感じるようなモノかもしれない

明るい事が当然であつた日常が、そうでは無くなる事の非日常的なモノへの不安感

『当然だつたモノが、そうでは無くなる事が・・・』

「・・・でね、先生が・・・って お兄さん聞いてます？」

「あ、すまん 考え事してた」

「ぶう～～」

楽しそうにお喋りしていた梓だつたが、浩史が話を聞いていなかった事に頼つぺたを膨らませて怒る

ジロリと上目遣いで睨みつけているのだが、どうやっても迫力が無い・・・寧ろ可愛い なので頭を撫でる

「ごめんごめん」

「むう～ そうやって誤魔化すんですねっ」



なでなでなでなでなでなで……

「…………えへへえ」

機嫌が直ったようだ

そんな調子で歩き続ける事十数分、ようやく梓の家の前に到着した  
二階建ての中々立派な一戸建て住宅だが、ガレージの天井が崩れ  
て車のボンネットにコンクリート片が散らばり

建物の壁にも亀裂が見える 窓には薄っすらとランプ独特の柔ら  
かい明かりが灯っていた

「家の人は居るみたいだね」

「そうみたい・・・お兄さんも一緒に来てください」

梓は浩史の手を取って玄関まで引つ張っていく・・・手を握られ  
た事に戸惑った浩史だったが今更かと思いなおし

明かりが点いているとはいえ、緊急を要するような事態が起こる  
事も考えられるので大人しく付いて行く

「あれ、開かない」

少し歪んでしまったのか、鍵は開けたものの梓の力では扉が開か  
なかったので手伝ってやる

「結構硬いな、ボールでも持ってきてくりゃよかったか」

「おかーさん ドアが開かないよー」

少しだけ出来た隙間から家の中に呼びかける梓

しばらくして廊下を走るスリッパの音が近づいてきた

「あずさ！？ 無事なの？」

やはり心配していたのだろう、内側から扉に体当たりするようにしてどうにか開く事が出来た

重厚な扉を観察すると・・・戸枠と扉がかなりズレている、これでは開けるのも閉じるのも一苦労だ

「ただいまー」

「ああ・・・梓 よかった」

母娘の抱擁を眺めつつ、梢はちゃんと家に帰っているだろうかと自宅の方角に視線を向けた  
意外と人通りも多かったし、家が無事なら近所の家も無事だと思われる、危険は無いだろう

「梓、此方の方は？」

「浩史お兄さん、地下街でトイレに閉じ込められてたわたしを助けてくれたの、んで家まで送ってくれたの」

「ども」

たどたどしく説明する梓の後ろで会釈する

「それはどうも、有り難うございました」

「いえいえ」

その丁寧なお辞儀の身のこなしに育ちの良さが窺える、それだけにこの線の細そうな女性が

扉への体当たりを敢行する様は想像がつかない・・・娘の事を余

程想っている事が感じられた

「それじゃあ、俺はこれで」

「えー、もう帰っちゃうの？」

家に招待する気満々の梓に苦笑しながら用事がある事を伝える

「悪いな、家で妹が待つてるから・・・」

「梓、我儆言っちゃいけません」

「むう・・・はい」

母親にも嗜められて洪々承諾する梓

「お兄さん！ また今度遊びに来てね」

「そうだね、機会があればそうするよ」

こんな状況下になりながら自分の日常を崩さない梓に

只の天然少女ではなく、芯の強さのようなモノを感じた

『この子の和む笑顔や雰囲気は、本当はこの子の安定感がそう感じさせているのかもしれない・・・』

梓の人物像に対する認識を改めながら、彼女の家を後にする浩史だった

## 第十二話：関係

梓の家から10分程で自宅に到着した。何時もの通い慣れた道も、明かりが無いだけで随分と印象が違ってくる

途中、塀の崩れた家や少し傾いた家を見掛けたが、この辺りは比較的被害が少ないようだ

「ただいま」

電気の消えた家に帰宅し、声を掛ける

玄関を入って直ぐのダイニングのテーブルの上に蠟燭が灯してあった

「お帰り、お兄ちゃん・・・」

「ああ・・・ただいま」

居間から梢が出て来た、暗いので表情は分からないが声には若干張りが無い

「親父とお袋は？」

「お父さんはまだ会社から戻れないみたい、お母さんは着替えとかを届けにいったよ」

「そうか・・・」

何時もの癖で冷蔵庫を開けるが、当然中も真っ暗 辛うじて清涼飲料水のペットボトルが見えたのでそれを取る

コップを並べてペットボトルの中身を注ぎ、冷気の無くなった冷蔵庫に戻す

「梢、話がある」

テーブルにコップを置きながら梢に座るよう示唆すると、梢は黙って椅子に座った

真ん中に置かれた蠟燭の灯りだけが、ゆらゆらと二人の顔を照らし出す

「……え」と、その

「……うん」

言い難い、いざ話そうとすると何処からきり出せば良いのか掴めず、中々話に入れない

もどかしく過ぎていく時間に比例して二人の緊張が高まり、余計に話し辛くなる悪循環

『でも……、言うしかないよな』

意を決し、切っ掛けとすべく最初の一言を放つ

「梢は、俺の事をどう思ってる？」

「……お兄ちゃんは、ボクの事どう思ってるの？」

思わぬ質問返しに戸惑い、予定していた話の流れをいきなり掴みそこねた

しかし、十分に予測出来えた事態だと思い直して話を続ける

「俺は、お前の事を妹としてよりも、女の子として見ていた部分がある」

小さく息を呑む音

「ボ、ボクも・・・お兄ちゃんのコト、お兄ちゃんじゃなく男の人として見てるトコがあるよ?」

微かに声が震え、動揺している気持ちが伝わってくる・・・、それは不安か、期待か　・・・或いは両方か

浩史は頷き、コップの液体を一口飲んで姿勢を正す。　まずは確認を取る事が出来た、次は・・・

「梢は・・・どうしたいんだ?」

「お、お兄ちゃんは?」

予想通りの答えが返って来る

「まずは梢の気持ちを聞かせてくれないか?」

「お兄ちゃんが先!」

頑なで気性の激しい所がある梢は、こうなっては絶対に引き下がない

浩史は仕方ないなと軽く溜息を付いて自分の考えを話す

「俺は、お互いの気持ちをよく話し合った上で、一度距離をとった方がいいと思ってる」

ハッとなって顔をあげる梢、・・・戸惑いの眼を見開き、徐々に猜疑心に顔を歪める

そこには嫉妬の炎も含まれていた　不安と期待の入り混じる震えた声から一転、低い声で梢は言った

「・・・あの子の事を？」

「まあ、考える切っ掛けではあるけど 梓ちゃんが理由って訳でもない」

「嘘！」

「本当だよ、梓ちゃんには興味はあるけど 付き合いたいかと言えば分からない」

浩史は優しく丁寧に、根気よく本心を語る

そして、梢の核心に触れる為に促した

「梢は、どうしたい？」

「ボクは・・・」

激晃で赤くしていた顔を、今度は不安で青くする ・・表情豊かな梢の顔を眺めながら、浩史はその言葉の背を押す

「・・・つまり、迷う程度の気持ちだって事だな？」

「！？ ち、ちが・・・！ くっ・・・」

ガタンと音を立てて梢が席を立った 部屋に駆け戻ろうとする梢の腕を辛うじて掴む浩史

「梢！」

「嫌っ！」

「梢っ 今逃げたらそれで終わりだぞ！？」

「離してよっ！」

振りほどこうと暴れる梢を引き寄せ、捕まえる

「離してっ！ 離してよ！」

「ちゃんと話さないと駄目だ！」

「やだ！ 聞きたくないっ」

「俺はまだお前の気持ちを聞いてない！」

一瞬、ピクリとして抵抗が止んだ隙に一気に引き寄せて抱き締め、これでもう逃げられない

「・・・やだよ、どうせあの子と付き合う癖に・・・どうして拒絶されるって分かって言わなくちゃいけないんだよ！

ボクはお兄ちゃんの事が好きだよっ！ お兄ちゃんと付き合いたい！ お兄ちゃんに抱かれたいって思ってる！」

ポロポロと、涙を零しながら荒い呼吸で捲くし立て、そして力尽きたように膝から崩れる

「梢・・・」

泣き崩れる梢を胸に抱いたままゆっくり腰を下ろし、梢の髪を梳いて撫でる

慟哭が収まるまで、そのまま抱き締めていた

・  
・  
・

「落ち着いたか？」

「うん・・・ごめん、取り乱しちゃった」

泣いた事で溜まっていた感情を発散出来たのだろう、梢はスッキリした表情を見せている



恥ずかしそうに照れ笑いする梢の赤く腫らした眼と涙の跡が、浩史の心をチクリと刺した

「ごめんな、泣かせちゃって」

「ううん」

優しく微笑みあう　そして、今度は梢の方からきり出した

「・・・やっぱり、ボクとは付き合えないの？」

浩史は少し考え、はつきりと答えた

「そうだな、付き合えないな」

「・・・それは、やっぱり兄妹だから？　それとも・・・ボクの事、女の子として見てるだけで別に好きじゃないとか・・・」

最後の方の言葉は小さく霞むような声で、目を伏せながら問い掛ける

「いや、好きだと思う」

「え・・・!」

パツと顔を上げる梢、浩史は落ち着いた表情のまま、自嘲気味に言葉を続けた

「判らないんだ、それが本当に恋愛対象としての好きなのか、重度のシスコンなノリなのかね」

「そんなの・・・　じゃあ、試しに付き合ってみれば・・・」

「駄目だよ」

浩史は首を振りながら手で発言を制し、安易な妥協に縋ろうとする梢を嗜める

「俺たちはまだ学生で兄妹だ、例え世間体とか倫理観とか関係なくとも、もし付き合ってみた後で

俺の気持ちが悪愛としての好きじゃなかったら、お前・・・その後の生活に耐えられるか？」

「・・・それは」

梢は浩史の云わんとしている事を理解した、自分たちはまだ両親に養われる立場の子供

家に居るのが辛いからと言って簡単に家を出られる身分に無い

もし、「試し」に一時の恋人気分に浸った後、やっぱり恋愛の愛ではなかったと言って別れる事になったりしたら

互いに気拙い生活を強いられるかもしれない・・・自分はそんな生活に耐えられるだろうか

『もしそんな状態になってそれが続いたら・・・お兄ちゃんは何に彼女を作ったり・・・』

或いは、元々不安を抱えたままの仮初の付き合いに、別れ話を持ち掛けられたりしたら

あらゆる手を尽くしてでも離すまいとするかもしれない・・・それこそ身体を使っても

「俺は、そんな気拙い中でお前に死なれたり、気拙さから逃げる為に誰かと付き合ったりするのは御免だしな」

そんな梢の心中を察したように浩史は言った　そして決断を迫るのではなく、理解を求める

「だから、俺たちはしばらく距離を置こう　・・・な？」  
「・・・お兄ちゃん・・・」

## エピローグ

あの震災から一年が経とうとしていた

街の復興は意外と早く、災害一週間後には電気と水道は復旧した  
ガスの供給はさらに五日後で

ガス湯沸かし器を使っている家はその間、中学校のグラウンドに設置された架設銭湯に通ったりしていた

『今日で高校も卒業か、来年は梢が卒業で再来年は梓が高一になるんだなあ』

崩壊した建物の痕跡は既になく、地下商店街も規模は若干縮小されるが 半年後には再開されるらしい

「お兄ちゃん！」「お兄さんっ」

「やあ、梢、梓も来てくれたのか」

この二人も明日からは高三と中三のコンビになる

「卒業、おめでと」

「おめでと」

「ありがとう、二人とも今日は何処か出掛けるのか？」

初めの頃こそ余所余所しさのあった二人だが、今では姉妹のように仲が良い

結論から言うと、俺は二人と恋人関係にある  
所謂二股になるのだが、二人の公認なので後ろめたさは既に無い

梢と距離をとった後、数日を置かずして俺は梓と付き合うようになった

やはり梓の笑顔は俺を和ませ、彼女の彼女足らんとする内面の強さに惹かれたのだ

そして彼女の内面の強さは、俺の中にあつた弱い部分を照らし出す

何度目かのデートの帰り、公園で何時もの別れ際のキスをした後に突然告げられた

『お兄さんはわたしをちゃんと見てくれるけど、時々何かを見ようとしていない眼をしますね』

その時、俺は思い知つたのだ・・・まだ彼女の事を侮っていた、俺自身が眼を逸らしていた事

耐えねばならない事として梢と距離をとっている事が、本当は逃避だった事を

『わたしは、誰かの代わりですか？』

最も否定すべき問い掛けだった

『誰も梢の代わりにはならない、だから梓を好きになつたのは梢の代わりなんかじゃない』

『お兄さんだって、お兄さんの代わりになれる人なんて居ないんですよ？』

俺はその時、梓の云わんとしている事が判らなかつた

『いきましょう』

『・・・何処へ？』

『お兄さんが、見ようとしなない人の所です』

『梢の事は、二人で話し合って決めた事だ・・・』

そして、あまりにも自然体で紡がれる当たり前のように決定的な言葉

『認めちゃうんですね、梢お姉さんから眼を逸らしている事』

そのあと、梓は呆然としている俺の手を引いて俺の家まで来ると玄関に出て来た梢に向かって言った

『わたし、お兄さんの事好きですから 梢お姉さんに独り占めはさせません』

『！っ・・・な、なに 言ってるのよ！ ボクは関係ないでしょ！？』

俺は梓の行動が判らなくなり、更なるショックで呆然と二人のやりとりと見ているだけだった

『でも好きなんですよね？』

『そりゃあ・・・でも・・・』

梢は黙っている俺にチラチラと視線を向けて、この状況の説明を求めているようだったが

俺自身も困惑し、梢のアイコンタクトに答える余裕は無かった・

・そして梓の爆弾発言

『お兄さんと付き合って見ますか？』

『・・・は？』

『ですから、お兄さんと恋人同士の付き合いをしてみませんか？  
あ、もちろん真の恋人はわたしですけどね』

『あ、あんた・・・何言ってるの？』

『だってお姉さんは、お兄さんの事好きなんでしょう？ わたしもお兄さんの事大好きです』

で、お兄さんはわたしの事もお姉さんの事も好きなんです、だから6対4くらいで付き合ってみますか？』

『わたしが6ですよ？』と付け加えながら澄ました顔で居る梓に、梢の表情が怒りに染まっていくのを見て

ようやく我に返った俺は事態の收拾を図ろうとしたが、何をどうすれば良いのか思いつかなかった

『あんた・・・ボクのコト馬鹿にしてるの？！』

『そんな事しませんよ？ お兄さんの事、好きじゃなかったんですか？』

『ふざけないでよ！！ あんた、おかしいんじゃないの！？』

自分が何言ってるか判ってるのアンタ！！』

『ですから、二人でお兄さんの恋人になりませんか？ って事です、もちろんわたしが本妻ですからね』

激昂する梢と、それを意に介さず さらりとトンデモ無い事を口走る梓

この時ばかりは、俺は本当に無力だった・・・仲裁のしようがなかったのだ

『おかしいよアンタ！！ 普通じゃないよ！？』

吐き捨てるように言い放つ梢に『言い過ぎだ』と諫めようとしたが、梓の一言でそれには及ばなかった

『兄妹で愛し合うのは、普通なんですか？』

梢は、何も言えなかった 俺も、何も言えなかった しかし梓は、俺たちの葛藤なんか遙か彼方に吹き飛ばす

『誰かを好きになる事って、少しは条件があつたりもするけどでもそれは好きになるルールとは違いますよね』

決まり事とか、他の人達がこうだからとか、そんな事で好きな人が決まるわけじゃないですよね』

『  
・・・  
』

『好きになったから好き、わたしはそう思います だから、好きになった人の事は好きで居ていいんですよ  
一組のツガイじゃないとイケナイなんて、誰が決めたのか判らないルールなんて、そんなのポイしちゃえばいいんですよ』

そして、あの和む笑顔で言った

『だって 好きなんだもの』

俺と梢にとっての一番の理解者であり、梢には一番の恋敵ライバルになった瞬間だった

・・梢は梓の提案を受け入れた、俺はその決断に文句を言える立場に無いと分かっていたから黙って甘受した



ただその後、梓がへなへなと座り込んで

『梢お姉さん、怖かったよぉ』

と、玄関先で大泣きを始めたので宿めるのが大変だったりしたが・

・

「今日はお兄ちゃんの卒業パーティーだね、梓」

「うんうん」

「パーティーつつても 何も用意してないぞ？」

カラオケにでも行くって手もあるが・・・なるべくデート代の  
為に資金は残しておきたい

「だいじょうぶ、わたしの家にお菓子とかいっぱい用意してあるから、今日はわたしの部屋で3Pしよう」

門の前にいた生徒達が一斉に振り向いた・・・硬直する俺

「あ、あの・・・梓？」

「えへへへ」 昨日ちゃんと新しいコントローラー買って置いたんだよつ 朝まで対戦しようね」

此方に集中していた周囲の視線が『な〜んだ』といった様子で散  
つていく・・・梢は肩を震わして笑いを堪えていた

「お前達・・・わざとやったな・・・？」

「え？ 何の事かな？ ボクわかんないなあ」

とほほ気分で頂垂れる俺に、梓が背後から飛びついてくる

「じゃあ わたしの家までおんぶGO」

「あ、じゃあボクはお姫様抱っこで」

「出来るかつ」

じゃれ合いながら梓を背中に乗せ、梢を右手にぶら提げて梓の家に向かう俺の耳元で二人が言った

「わたしの家、明日までおとーさんは出張で、おかーさんは実家に里帰りですよ」

「今夜は寝かせないからね、お兄ちゃん」

「・・・」

俺はきつと幸せ者なんだろう、だから贅沢は言えない、泣き言もNGだ

二人が俺の事を愛してくれるのだから、俺も二人に負けないくらい愛してやらねば

そう、これは自分で選択し、自ら選んだ道だ・・・

「・・・行くしかないよな」

俺の呟きを聞いて顔を見合わせる梓と梢、二人はほくそえむように微笑んで頷きあった

「梓、今夜はきつと・・・」

「うん、忘れられない夜になりますね・・・」

「？ 何の事だ？」

俺の問いに、二人は微笑んで両側から頬にキスをくれた  
温か  
い春の風に、サクラの花びらが舞っていた

おわり

## エピソード（後書き）

当時色々と練りこみ不足かなと準備不足を痛感した作品でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3717d/>

---

絶体絶命兄妹

2011年5月20日11時27分発行